

泉南地域における歴史的街道

大阪から和歌山への主要な歴史的街道としては、「紀州街道」「熊野街道」があげられる。その他、脇街道として「葛城」「水間街道」「粉河街道」「根来街道」なども、古くから人々の往還の役割を担った街道が存在している。

紀州街道 きしゅうかいどう

堺、泉大津、岸和田、貝塚、泉佐野などを貫き、大坂と和歌山とをつないだ街道である。古くは、難波海沿岸の集落をつなぐ生活街道であったが、摂津国住吉郷に鎮座する住吉大社への参詣、また和泉国大鳥郷にある宿院順宮へ向けての巡行路である「住吉街道」として整備されたのが始まりである。江戸時代になると、岸和田城下と貝塚寺内町をつなぎ、南北に縦貫する道路や、熊野街道などをを利用して、徳川紀州藩、岸和田藩の参勤交代路として整備された。因みに、州街道が整備される以前の元禄14年(1701)まで、紀州藩の参勤交代路は五条・吉野を経て、大和国と伊勢国との高見峠を越え伊勢へ出る險しい道筋であった。この紀州街道筋は海に近く、海上交通と競合する状況にあったが、経済活動が活発化した近世以降も、左程通行量の増加は無く、実際には主要な街道ではなかったともいわれている。

能野街道 くまのかいどう

京から船で淀川を下り、大坂の渡辺津を経て、熊野三山（熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社）への参詣路たる街道の総称が「熊野街道」である。街道沿いには、熊野権現を祭祀した九十九王子（くじゅうくおうじ）が設けられた。参詣者は道中の無事を祈念しながら旅を続けた。平安中期ごろから、熊野三山が神道と仏教が習合するかたちで、阿弥陀信仰の聖地として多くの人々から信仰を集めようになるには訳がある。

熊野神道は、他の修驗道と異なり「女人禁制」を問うことをしない。しかも老若男女全てを受け入れるだけでなく、らん神道系からは邪宗と見なされた仏教をも積極的に受容するという、ある種大度かな土壤があった。末法思想に反打ちされた阿弥陀信仰の隆盛と神仏習合のメッカともいえる熊野権現とが強く結びつき、熊野の地は人々から淨化されるようになる。

平安から鎌倉期、法皇・上皇などの皇族、女院らの熊野御幸や貴族の参詣は実際に夥しい回数を重ねる。室町以降は、家や貴族に代わって、武士や庶民の参詣が盛んとなり、その様子を例えて「蟻の熊野詣」とも言われるほど賑わうとする。江戸期には、伊勢詣と並ぶほど多く詣でたといわれる。そこには、熊野信仰のご利益を説き諸国を歩き回る、熊丘尼（くまのびくに）という尼僧集団の存在が大きかったともいわれる。まさに「女人禁制ではない」とか、熊野信仰に広めた一つの大きな起因であったことを示す話である。

生瀬街道 うしたきかいどう

岸和田の春木で紀州街道と分岐し、牛滝に向かう街道。牛滝の大威徳寺(天台宗山派)の参詣路でもあり、さらに進み萬城街道と合流する。

葛城街道 かつらぎかいどう

岸和田城下の本町で紀州街道と

さらに峠越えをして紀の川市名手で大和街道と合流する。

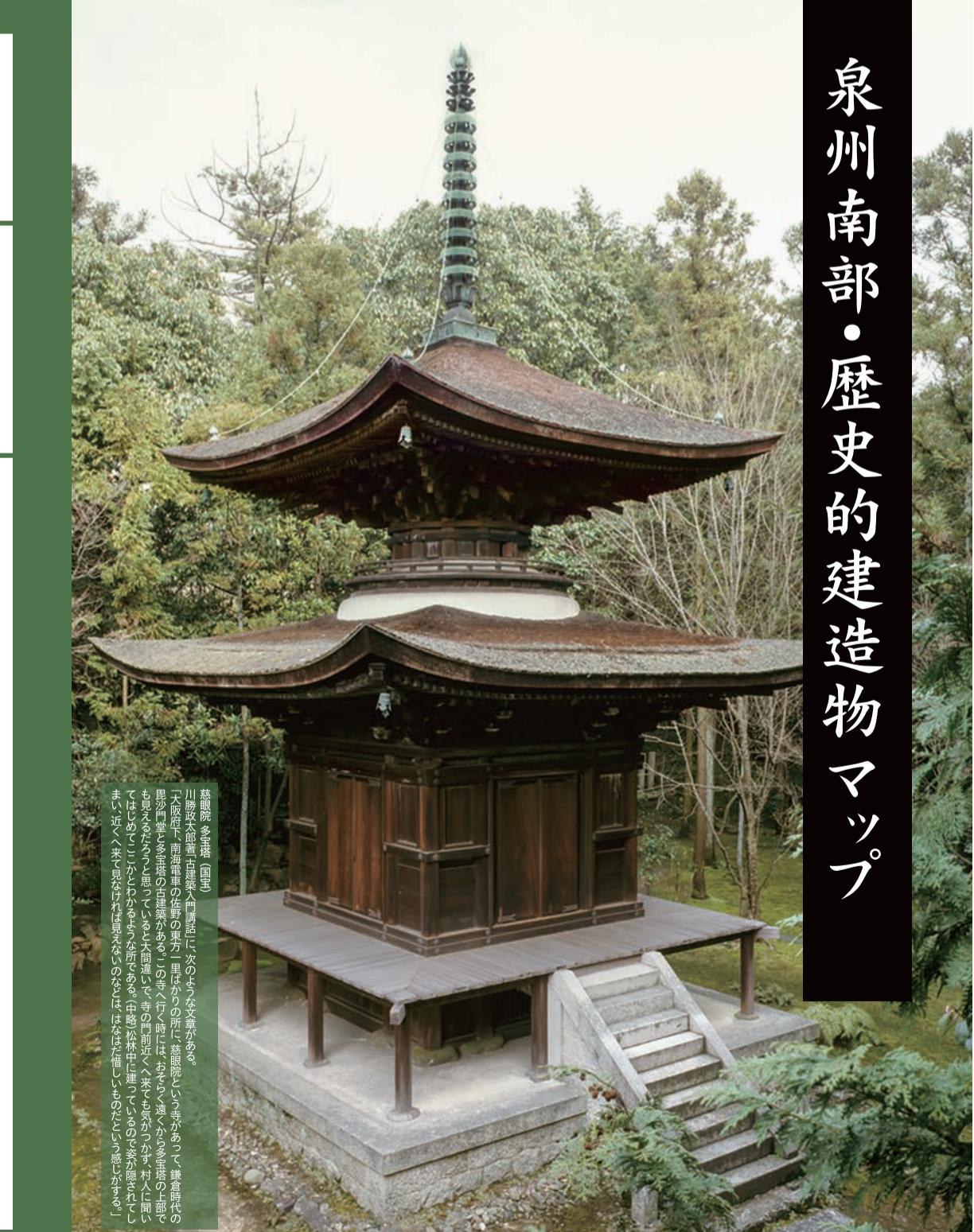
水間街道 みずまかいどう

貝塚の中町で紀州街道と分岐し、水間に向かう街道。水間寺(天台宗山門派)、孝恩寺(浄土宗)、白雲寺(天台宗)などがある。また、水間寺の西側には、古くは「水間の宿」があった。

■ 案文・参考文献

孝子越街道 きょうしごえ

別名、浜街道とも呼ばれる。泉佐野市の鶴原で紀州街道と分岐し、浜伝いに田尻町、泉南市の樽井、阪南市の尾崎・箱作、岬町の淡輪・深日を経由し、孝子峠を越えて和歌山市内に通じる街道。往時を偲ばせる街並み景観が残り、趣ある風情を漂わせている。孝子の由来は、橋逸勢の墓をこの地の改葬した娘の奉養に因んだ地名である。



泉州南部(泉南・下泉)の概観

泉南地域は、西に茅渟(ちぬ)の海(大阪湾)をのぞみ、瀬戸内の温暖な気候でもあり、石器時代・縄文時代そして弥生時代の遺跡・出土品が極めて多い。古墳時代の先駆けともいえる方形周溝墓や銅鐸も発掘されている。また、大規模な前方後円墳もみられることは、大和を中心とする古代国家の勢力圏に組み込まれていたことを証明づけている。

奈良時代の律令国家体制のもと和泉国が成立、条里制地割が施行された。この地では、弥生時代以来行われてきた藻塩製塩が盛んであり、主要な産業であった。行基の活動の痕跡、桓武天皇による日根野や熊取野での遊獵の記録なども残っている。平安末期の末法思想を背景とした阿弥陀信仰の隆盛に伴い、熊野街道が当地域を通り、道中には王子社が設けられ、また密教を習合させた葛城修験道も盛んとなった。鎌倉時代、泉南地域は、多くの御家人たちが所領を分割統治するなか、貴族の九条家領日根荘や高野山丹生社領近木荘などの荘園も存在しており、この地域の歴史に、文化面における色濃い影響を及ぼしている。特に、日根荘は、当時の多くが「寄進地系荘園」であったのに対し、領主自らが開墾する自墾の荘園であったことが珍しいと言われる。

南北朝期の岸の和田(にぎた)氏・日根野氏・淡輪氏などの新興勢力の台頭や、室町期の土豪層(真鍋海賊衆も含む)などによって、小規模勢力群の割拠状態となった。戦国期、この地域は、おおむね紀州の根来寺の勢力下に入り活動するようになるが、秀吉と家康との抗争の折、根来寺が家康方に合力したため、天正13年(1585)秀吉の紀州征伐により、根来寺勢力は壊滅状態となり、中世の時代は終焉をつげる。太閤検地は、まさに近世社会の創出を象徴する一大事業であった。それを機に、この地域におけるさまざまな勢力の割拠状態は改められ、江戸期にあっては、岸和田藩領やその他小大名領、幕府の直轄領(天領)、貝塚寺内町へと順次整理されていく。多くの領主の領地がモザイク状に入り組んだ、典型的な「非領国地域」の様相を呈する。

この地域は、江戸期を通して全国的にみても綿花栽培の一大産地・集積地であった。(大和川の付け替えに伴う河内の新田開発以前は、和泉の方が主力であった。)そして、工場制手工業の導入もあって、綿花農業、綿糸問屋は泉南の基幹産業に成長する。明治維新前後から、海外の安価な綿糸や紡績技術の流入により、紡績の工業化が焦眉の急となるなか、泉南地域は、いち早くその転換に着手し成功を収める。大正から昭和に入り、着実に技術革新が進み、日本有数の一大繊維工業地域

へと発展をとげ、現在に至っている。

第二次世界大戦後の高度経済成長、幹線道路の新設・拡張、都市化の波にも飲まれ、過去の歴史的遺産の多くが失われつつあるなかで、いまだに、そこかしこには、貴重な文化的な遺産を目にすることが出来る。それらの保存と活用が強く望まれるところである。